思案橋曉天奇聞
金松堂梓
芳川信雄校閲
二編上
岡本貴泉編輯
二編中
歌川國松画
二編下

思案橋暁天奇聞
芳川信雄校閲
金松堂梓
二編上

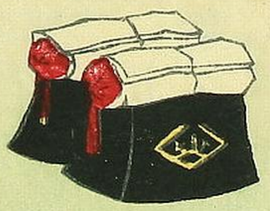
A560
4

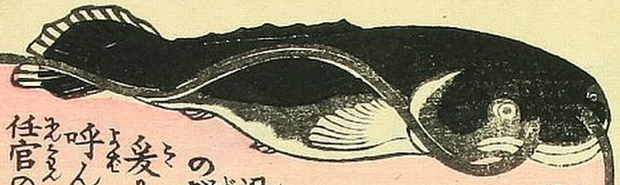
思案橋 曉天奇談 上の巻

武藤

岡本貴泉編輯

歌川国松畫　金松堂梓





同じく官海に在ながらも。鯰い毎もの〳〵しく然りて。給厚く。鰌ハ常びくく乎として。給薄く。實に物事ハ一切そなら。余ガ又當冊を綴るに於る。初篇ハ然まで苦まざりしも。僥倖に看客ハ興厚くして。文屋ハ次篇の促しかろ。然るに此二編の悪面倒る。彼松林の默闘解き。親子兄妹奇遇の顛末。夫是滅茶に重なりて頗る繁雑是を彼官海に比せば中々に。三時の退散思案ハき場合も却つて興薄き事。まさに柳葉鰌の給と一般。嗚呼辛い哉小給の鰌子。偖々苦しいるダレ場の編者。遊莫今是を記されば後の結局を如何せん。余爰に至つて平常の。野良藏ごころう夜辺の灯も。一層勉て書立しゴ。尚孰もの欠伸や呼んと。鰌ゴ〳〵ねど悸々のので。斯ハ出版するのの。此埋合りハ當冊中の御膳上等勅任官の。其見処とも申まべき。思案橋ろそ永岡ゴ。斬死の件ハ三篇に必ず御覧に入まされば何卒是におありなく。鯰の給のいと厚き御見貧呉々希ゴ

明治十五年二月

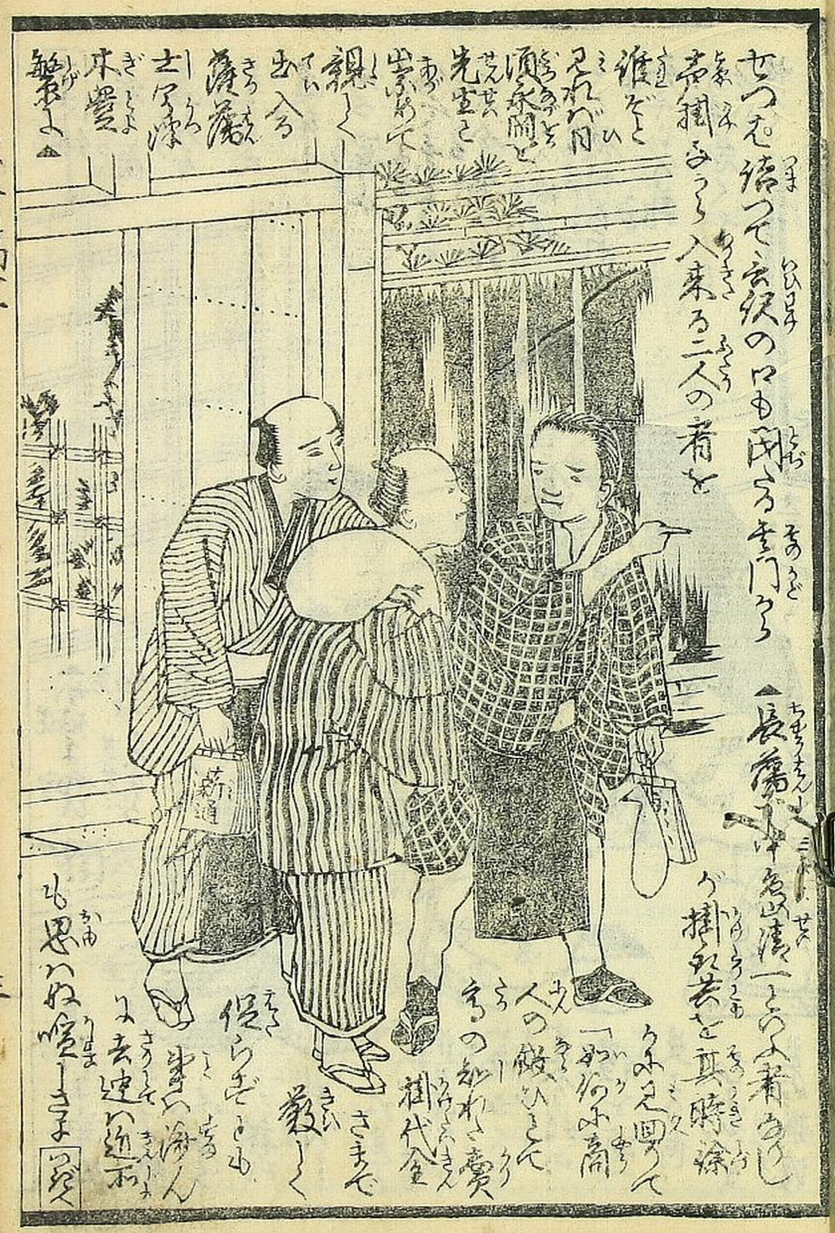
岡本貴泉述

48-8417

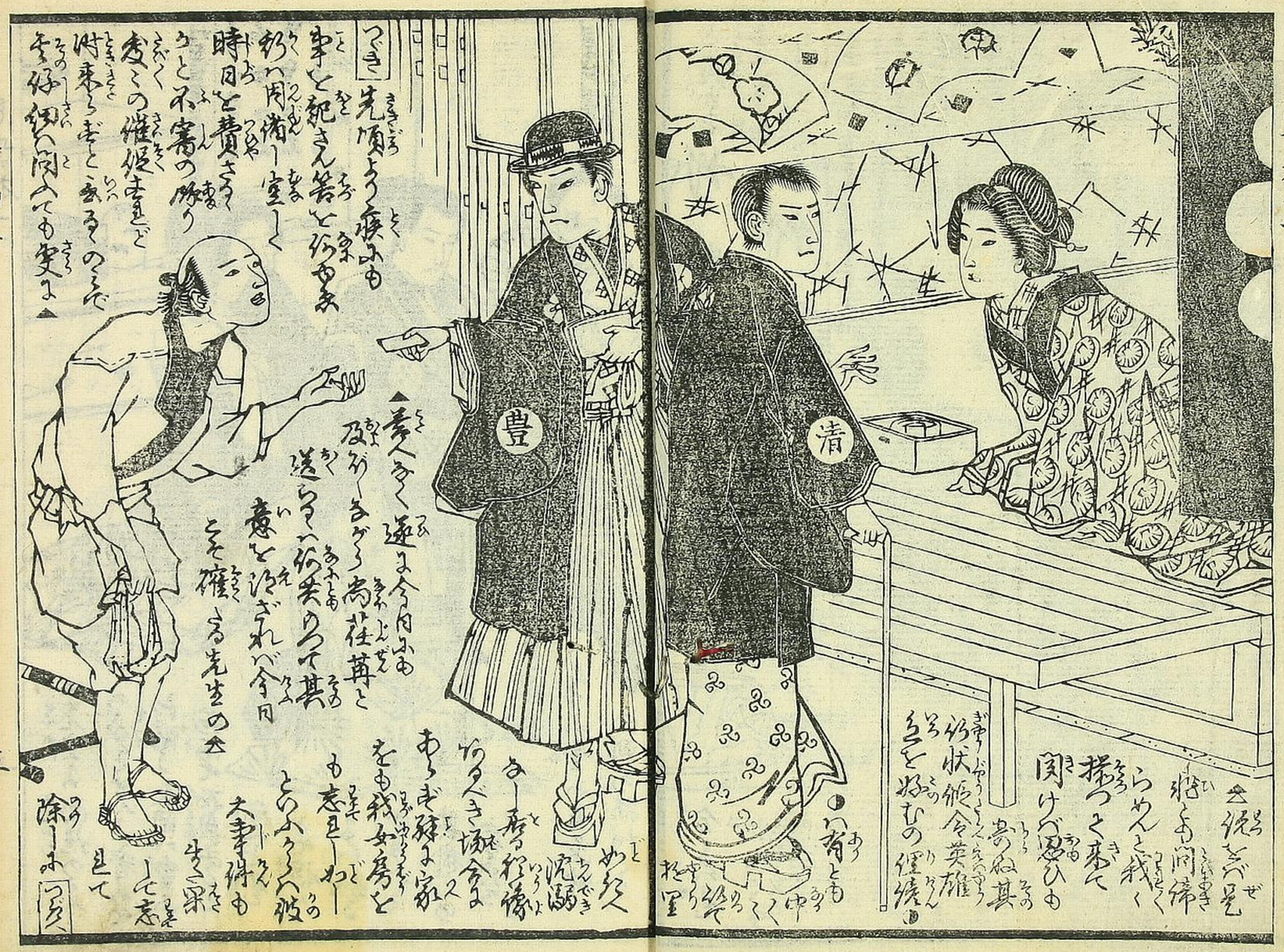
長藩士
中島清一
薩藩士
宇津木豊繁

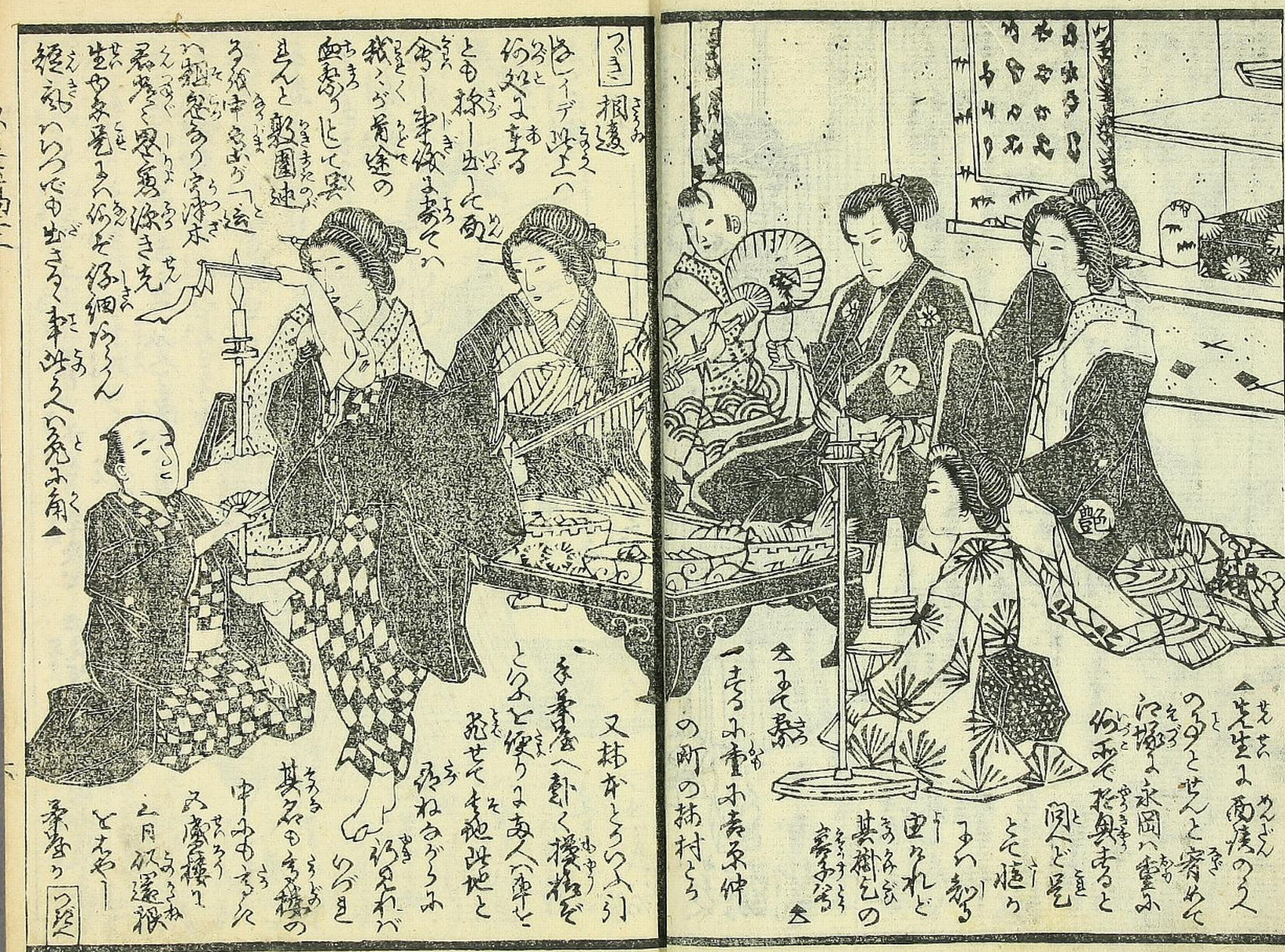
五盛楼
娼妓艶照
茶屋若者
実
松井新之助

寺本定芳


薪道

つゞき
豊
清
政
お仙


清
豊



▲先生ハ面倒のうへ
のうゆとせんと寄めて
行掘ハ永岡ハ霊ハ
伝ゆで拵奥ゆるると
関ど見
とて慣ら
ゆい新る
出られど
其樹色の
寄ゆ寄

▲ゆて素
一まるゆ重ゆ去京仲
の町の抜村とら

つゞき

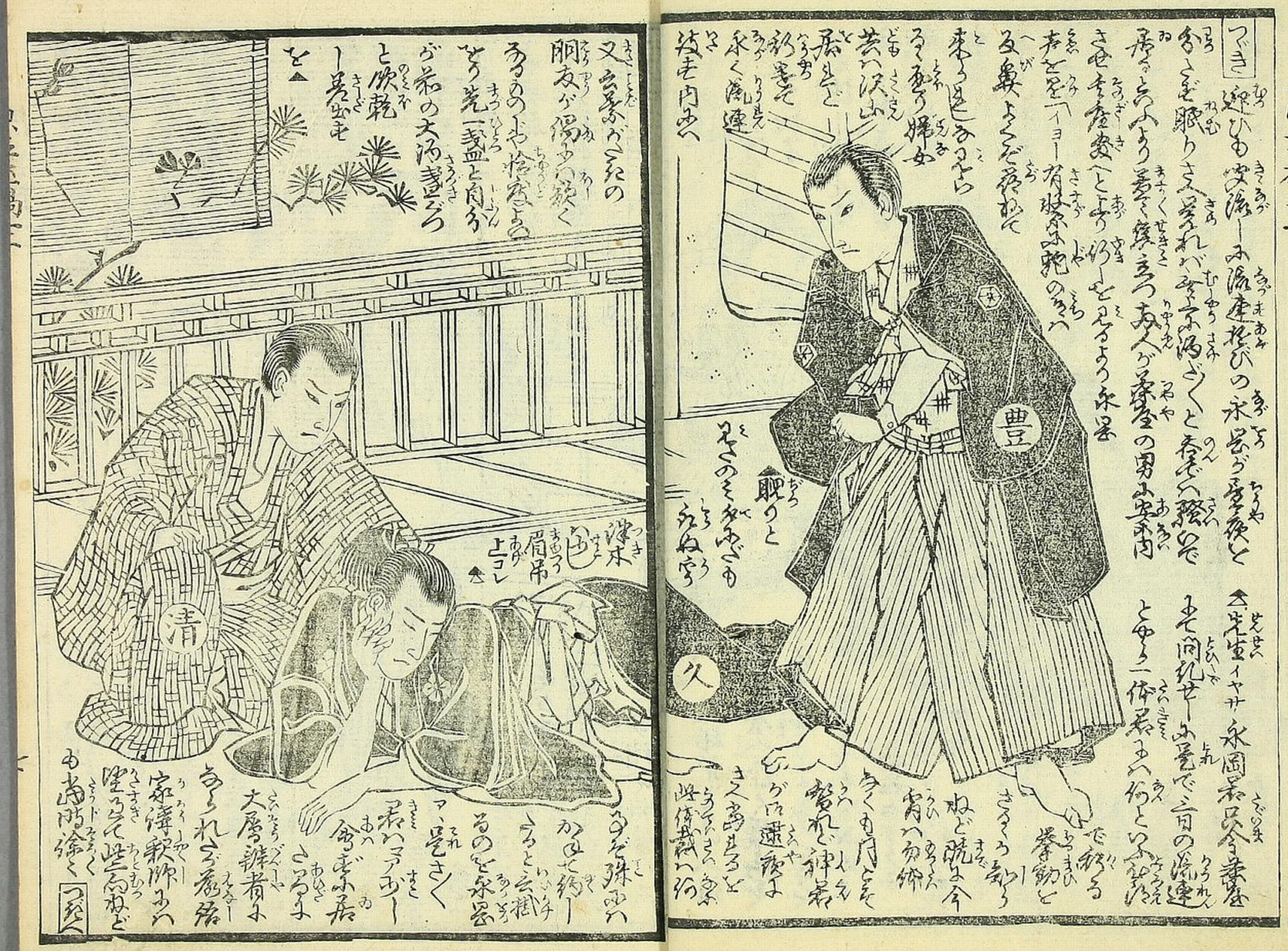
根遠

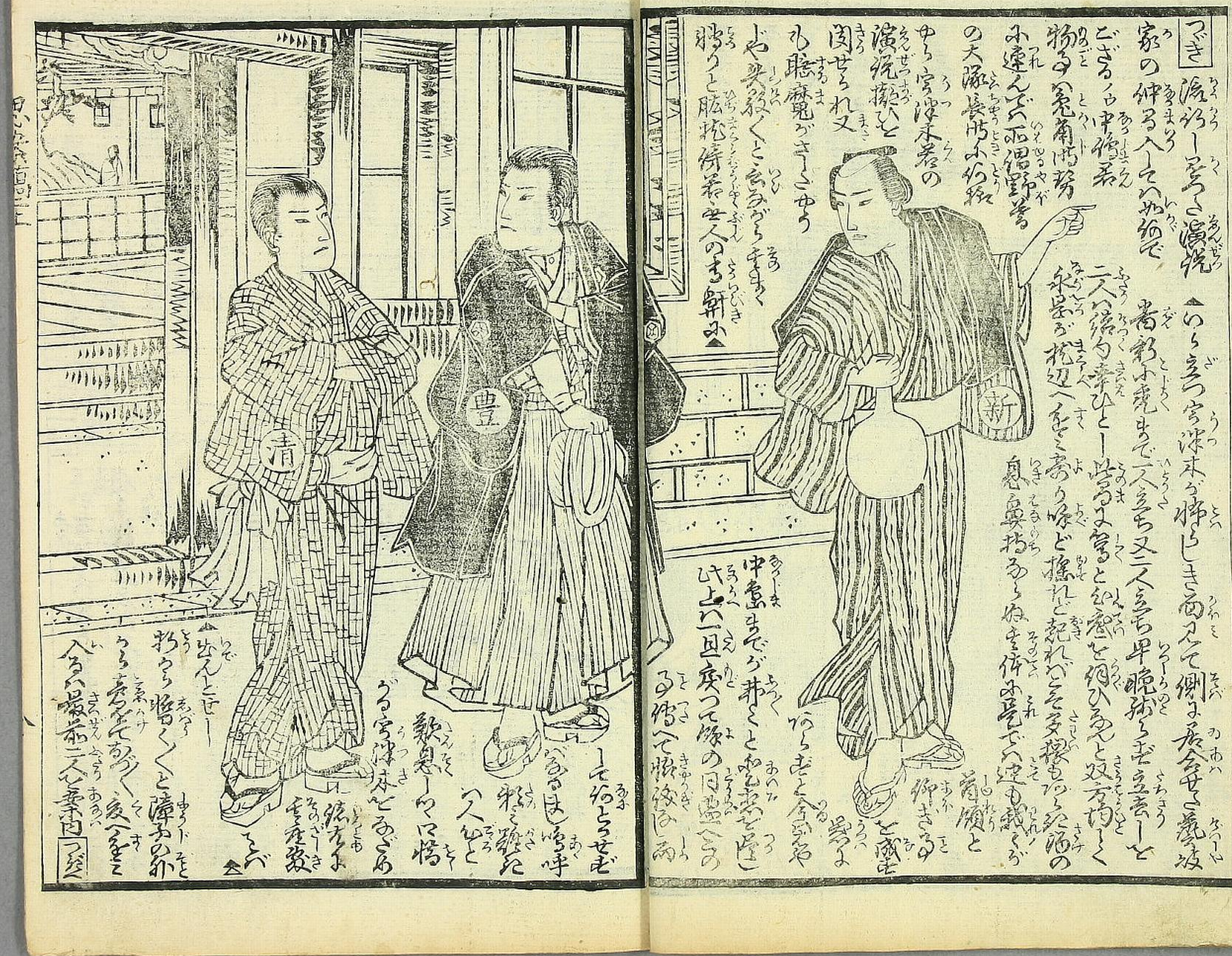
▲イデ此上ハ
伝処ゆ事る
とも称ー出して面
舎ー半仮まあてハ
我くゞ看途の
面寄り比て実
まんと彰園地
ろ後中ゆ「遠
い恨怨ゆ宇沢ホ
君考く恩寄ゆき先
生ゆ美ゆ伝ゆで伝細ゆくん
絶対いつゆゆ出さく事此ゆ人ゆ見み角

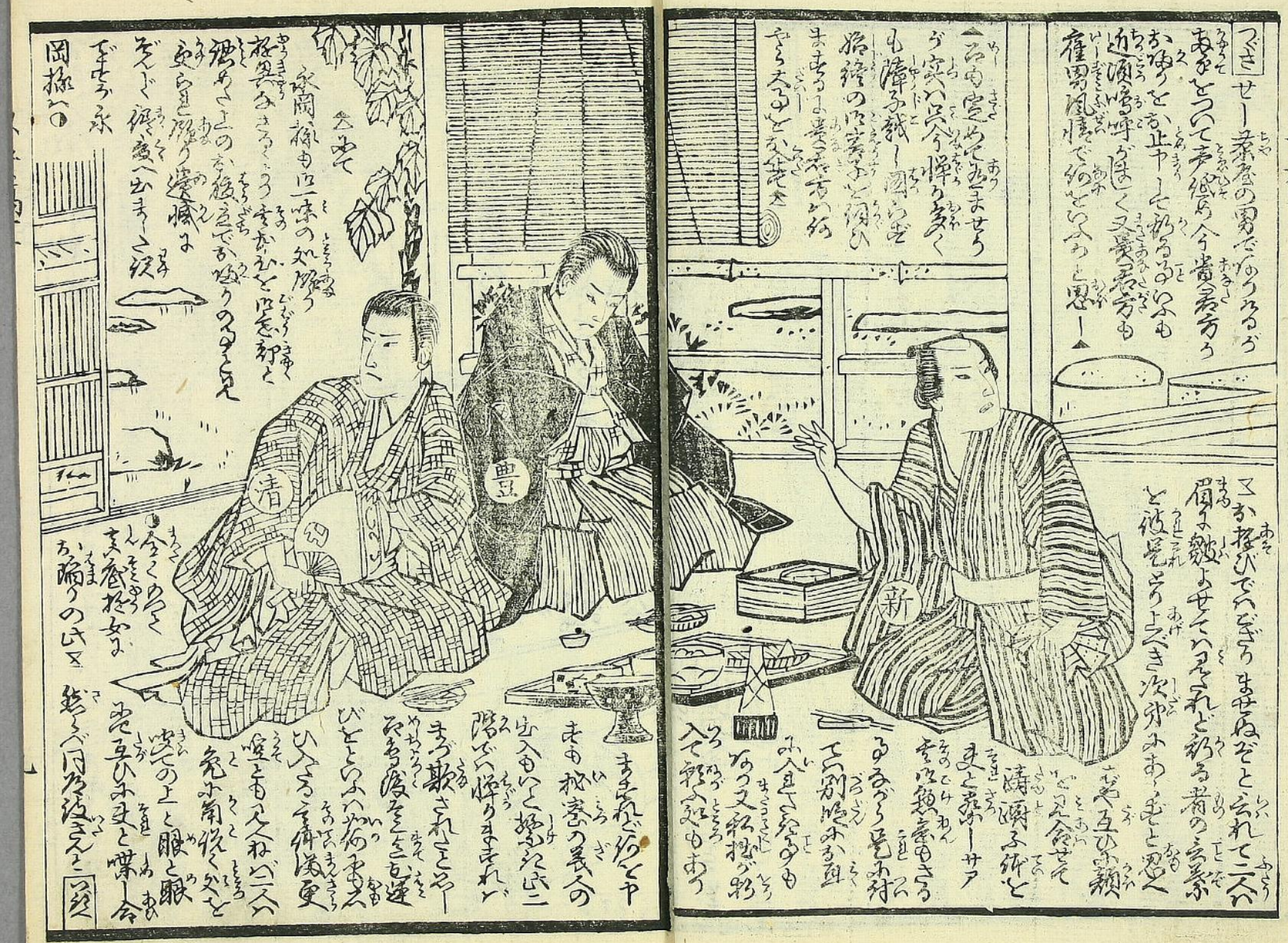
▲

又林ホとゆくゆ引
ゆ案屋ハ新く機格を
とゆゆと使りゆ女人ハ事と
発せて手地此地と
ゆねゆぐゆみ
ゆ見れば
の方見
其名の手楼の
中みゆ人
久慶楼り
二月仮遠根
とゆゆー
案屋ゆ

つゞき




つづき
新
豊
清



つゞき

せー素人の男でなのりるゝ
あるをとつて声低の今貴君方ゝ
おゆりを、止やしたゝかるのいふも
近頃号呼ぶほゝく又貴君方も
雇男風情で紙のとゝくゝと思ー

ゝ
お按ひでいぎゝ
間の敷よせていつまされと彩る者の云素
と彼見ゝ上べき次第みあ、まと思

互ひに顔
合せて
清爾ふ体と
迷と素ーサア
変な顔をさる
ゆるゝ見れ対
工別恐みる直
お入直さ発ゆも
なつ又紅拙が彩
入て軽又もあり

まされゞ分とヤ
まも拙者の義人の
安入もいと姫ゝ氏二
階ゞい悔りまされゞ
まゞ歌されとやー
ゝ
びとゝふゝ分ゝ
ひ入る手伸後更
喰ゝも入ねゞ二人ゝ
発み前後ゝと
安ての上と眼と眼
老耳ひみ丈と喋ー合
給べ門乃後さんこ

永岡拙も口一味の処腐
拙異みさるゝゝ
酒ゝさとのゝ後ゝでゝ
更らと腐り憂慨ゝ
ゞんゞく後ゝ愛ゝ出まゝさ後
ゞまゝゝ永
岡拙ゝ

今ゝくゝ
まゝ食拙女ゝ
ゝ喝ゝのゝ

010190514205

岡本貴泉編輯
二編中

A540
5

恩葉楊

曉天青竹

中の巻

芳川春濤園
岡本起泉著
歌川國松画
金松堂板

48-8418

上かたるつゞき

オヤ何時の
間にか眼が覚さ
ノ駕籠とんあ淀を
相乗で出と何処へ
行るう分りも世話ぬ
上間と云ッて
ベッ〳〵

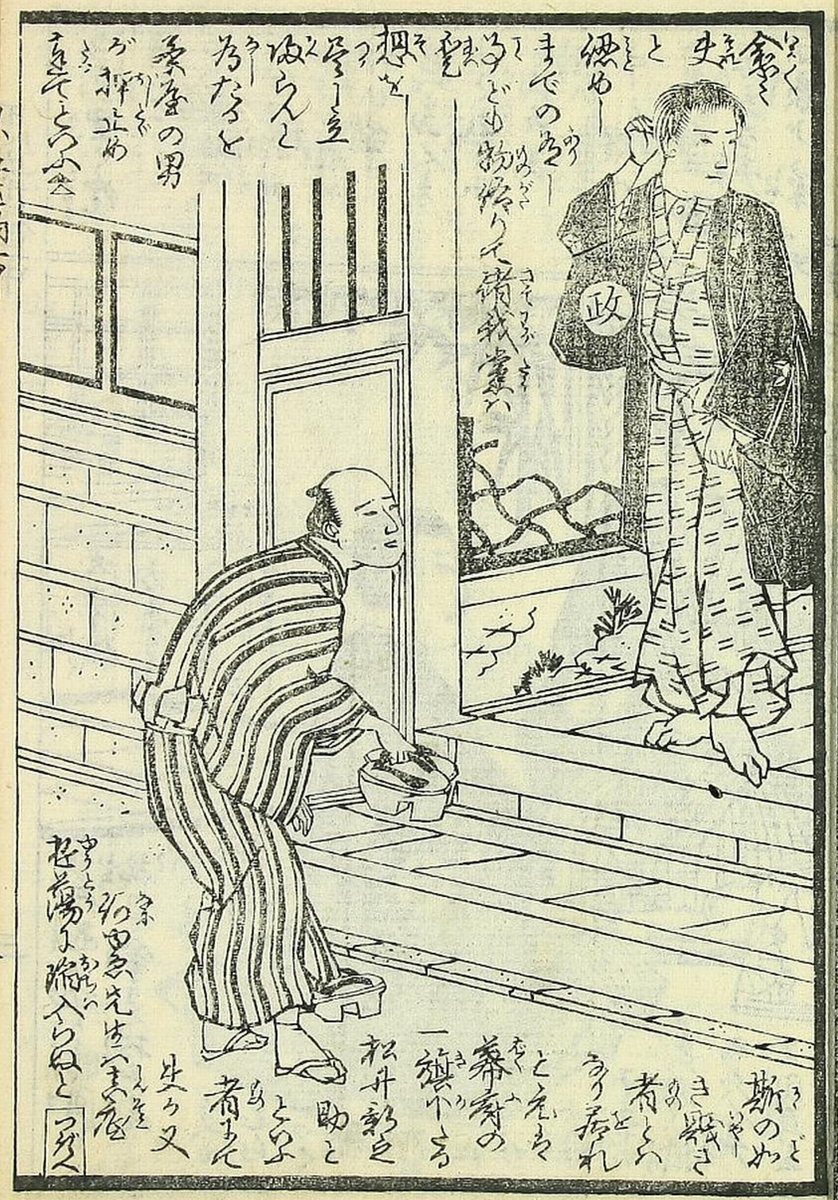
政

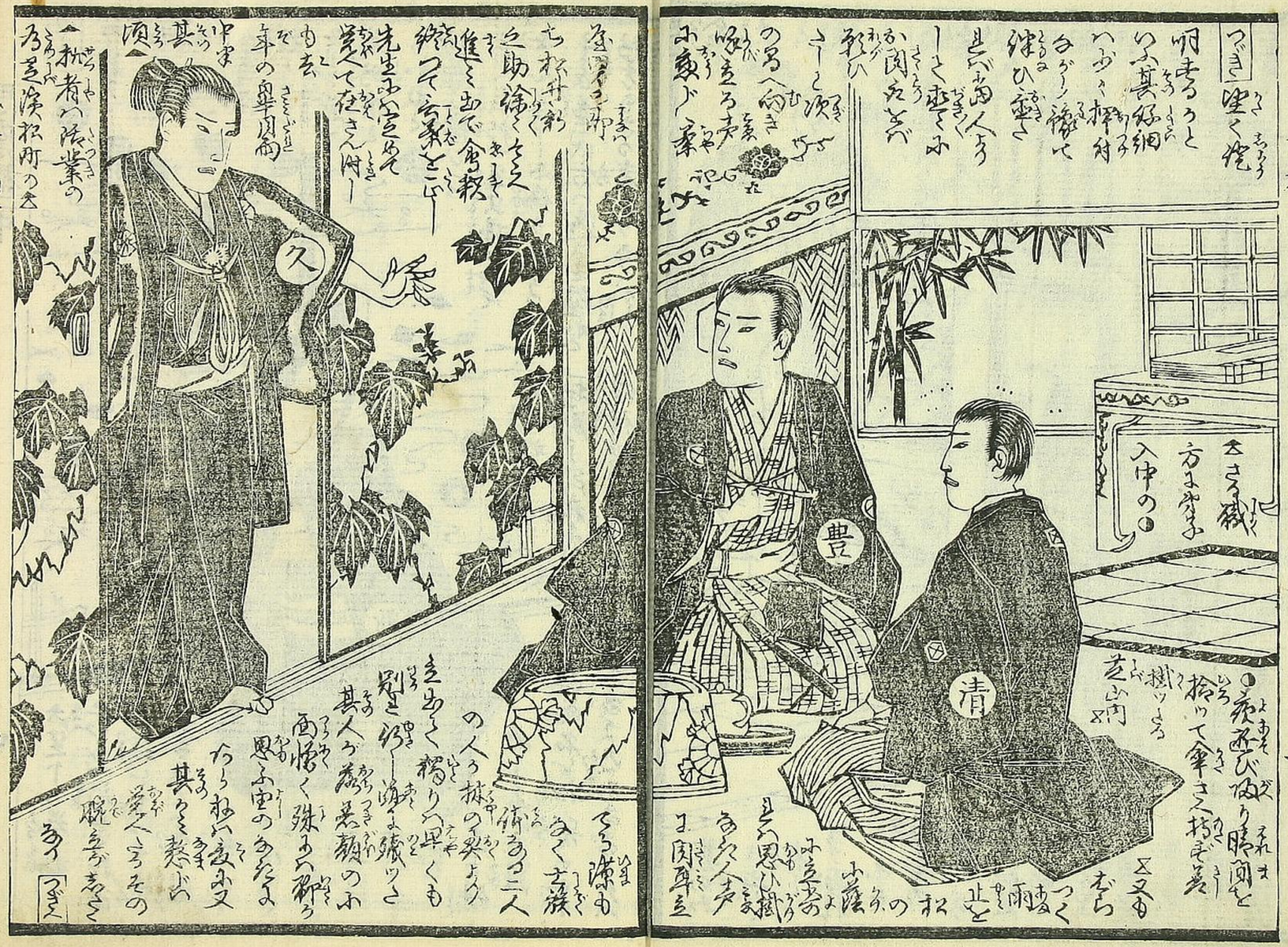
離れば永園がオ、
落て異さう新鮮
さ又長りも暑く水
も何
みも
入ん
鏡いの只湯ご
くと又も春
出陽氣も
ゆく雪後も此
処と明さん主
雪子朝ひみ
墨ひも

つゞき
政

久

つぎ
久
艶


政


つゞき
豊
清
久

つゞき

のさうの出さる前
腕と関て
永岡先生
絵と才、
なるべく我が
其時雅と
も知れど
弱腰と雅ひつ
まで病れつ足に拂ひ捨て
去んとせーふ偽り雅る
手を並「氏方い遠さに雅れど
彼方のさる者さう全く

▲提灯

「打為〜〜我れも
俺俺ぢう
ふ疾と

新

▲是十の挙動
若しへ故なく私を
よ我と支つて来
書などたく眼
と紛めて
今さて
我ご高家
よ拝場
書を本
ん
と張
り一此面名を抑肩の事
を、多よ及ぶ者とたへ
めーふ思張

戻されぬ色惜ー「手そう
内よ来掛る婦人交で西と
ちう見て使り悪ー
差出す▲

汐掛る「まと半ー」と又
雅ふと「拂ふ機ふふ蔵
せーとも「白紙をうね密
書の一至婦人ご拾へと
眼早く碧ら吳を落日
のかのその種と奪ふ徒
うも漸くと其半分と
得たる石ふ風差出相
をとれ迎しご後よ
故あつく西へ初る其
相をこそ永岡先生
「備い彼此の若者へ
呉下でなりしう結る
みてもいと誘へたへ

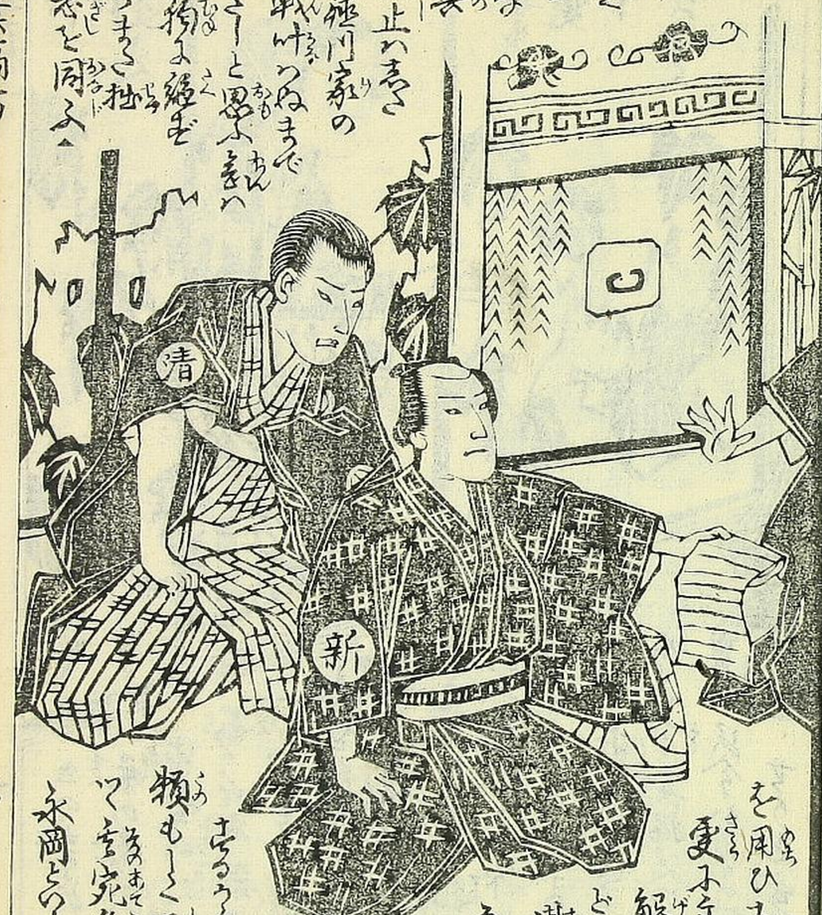
抑く我ら解せぬところ
俗細もなるべ関まふと
他事なく問えさく
彩を助さればよ作る
其義よ附て先刻者
ふのて表ふまで
奥さふ関へとうれど
来ご先生のお身ふ
入らねば其ふ義問
ふ道理さうべ変く
今一度こと
くどくもやーとん
そも松者まへ
呉今の中信義

つゞき

ようか関の通りを
でも幕府の旗下ゝうれ
い脱よ戊辰の没よるいゝ
若年ゝうゝも脱走の
輩よ支うゝ
徳川家よ
なそ是穀
豊る処ゝ
らんとせ
も癒病未
練の脱類
せめふ支へ
ゝら是老
や彩ゝる

ゝる
者ゝう
らぼゝ
と結く
揺うて
居ゝう
しよう
彼の脱藩
の密使も
居やと思へ
ば試見よ高つく
見ゝ上ゝよ入うし
密書の行方
懸下ゝよ源治

内頼む
舎津も
彦城し
ゝる結定
と関ゝう
ふ、豊ゝる
ゝうも其
俗よ黙止ゝ
是と志徳川家の
為よ一戦ゝつぬまで
も試ゝと思ふ志へ
須臾も移よ緩ま
して進ゝまゝ拙
者と心志を同ふ



を用ひあつく
更ふ文志へ
解せね
ども必よ
藩叛
みど就
ゝた人き
者の
密書
と推
ゝるうふいと
頼もしく思ひ
て意完名ゝる
永岡とゝ人

つゞき

人扨ハ
俗ちとと文さん
雇ろ
み藁ぶき
し其者と
名を赤ら
ましめと

斯る後世も
別し甲斐
あハ密人中
まて雇掃へ涼く
上領よ
臨いさく

△の事ハとも
系の美人ハせて
密書の行衛を
取りて打眺めく
行ふ世よ斯る密
書を紅蓋者といふよ
格る紅我粗忽丈よ附
ても此片端を拾ふ
とふ婦人とを拾ふ者
あて者しらと速よ知
捌とバや打案じる内しも
なとハイ其婦人ハ紅妻ヴ
呉今お見よ捌ま
せうと云て入ると

又行君ハ其の
南座の奥の方
と考よ一と見
るとバ又先生の
四拾奥も別よ
行綱のなる事と
疑く見て紅さ
拾ひ出ふ
るか二人の四者
ふ金く扨者の
胸へ的中
ハ斯ま及ぶ
備こと
みぐらハ紅附も殺せ
上あて四間盛よ方差加と

▲新ひ方
教者あて
ひと思ひ込んでそ
述べる拾者と関て
永岡ハ紅思よう
良難らく黙し
居る頃て△

次へ

△兵一人疾走も厭ふを
幸ひ向ふで行ゆく人の
和ゑふ郎ゑ乱
味悪くも怖いの
異てさき美生を提灯
うち蔵され吹聚生
怪迹ゆとーくぐ
又見バ行ゆやら
生門の一人ハ婦
ト賞方らーく
又提灯ハ行
消ゆさバ
行と乱の
美くまく

つぎハテ
仰こーの
和女ハお紙
行ゆ話して彼疾の婦人を
和出るとこ云れて今更
薄薄ーぐ思ひ恋ーを
出でサア其婦人ハ実ハ
私妻然晩安ぎち
掛後不岡乱ぐ行ゆぐ山
内のお蝶さんぐ明日ハ深川の

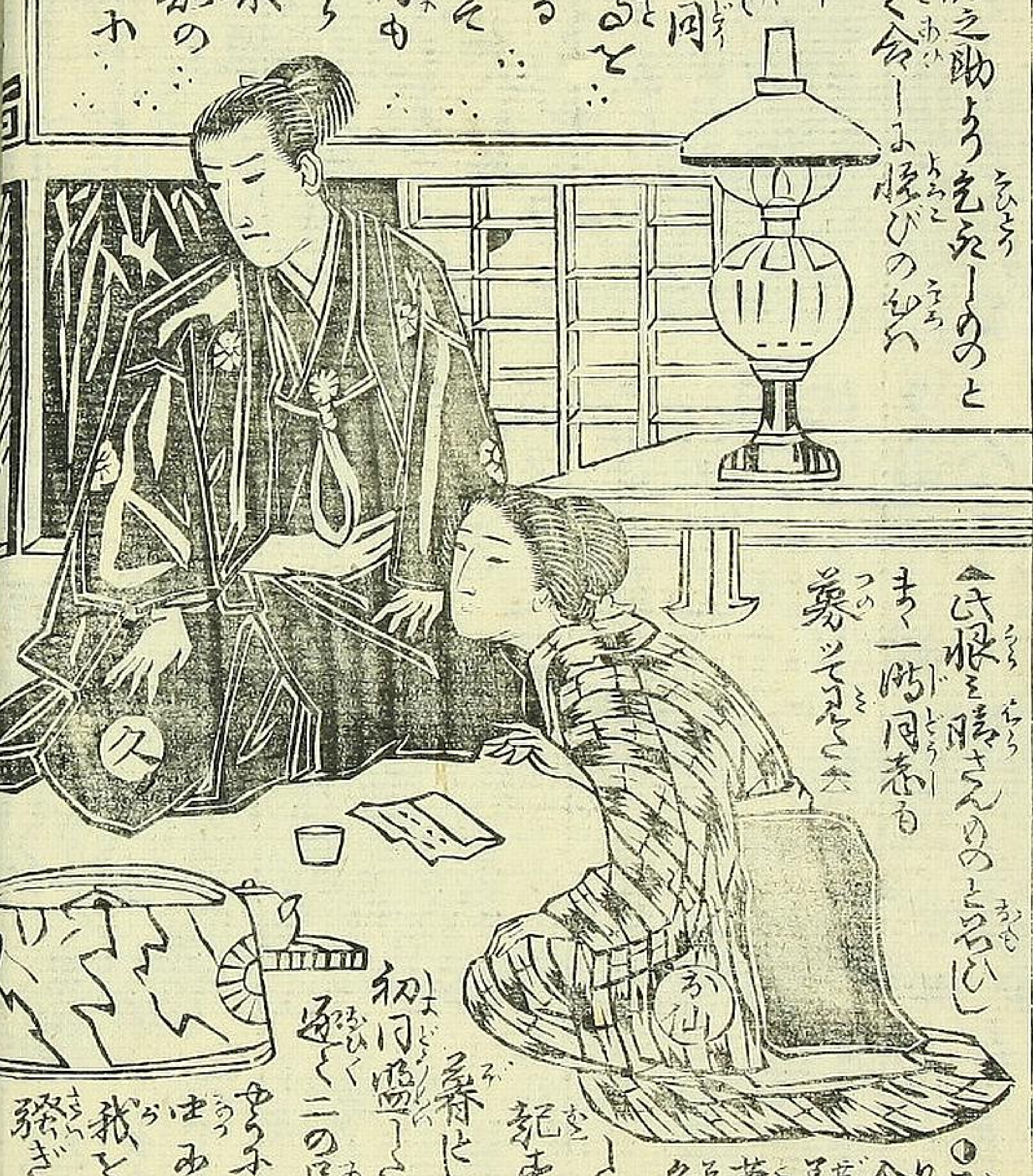
▲水壇人舎く
ほとうとむ
其帳を小赤ぐ
行ねバッイ一乞
うと別さ〜婦
人ぐそうも △

立も紙
去ぎ仮
淫く内岡
らぎ密去と
捨ふさ訳よ
て今も中
まハ此
あうと
言つ
元出ぎ書
猿の切ぎと
壁又気外ま
鞍ゆ知ぐう

半

永岡永ま

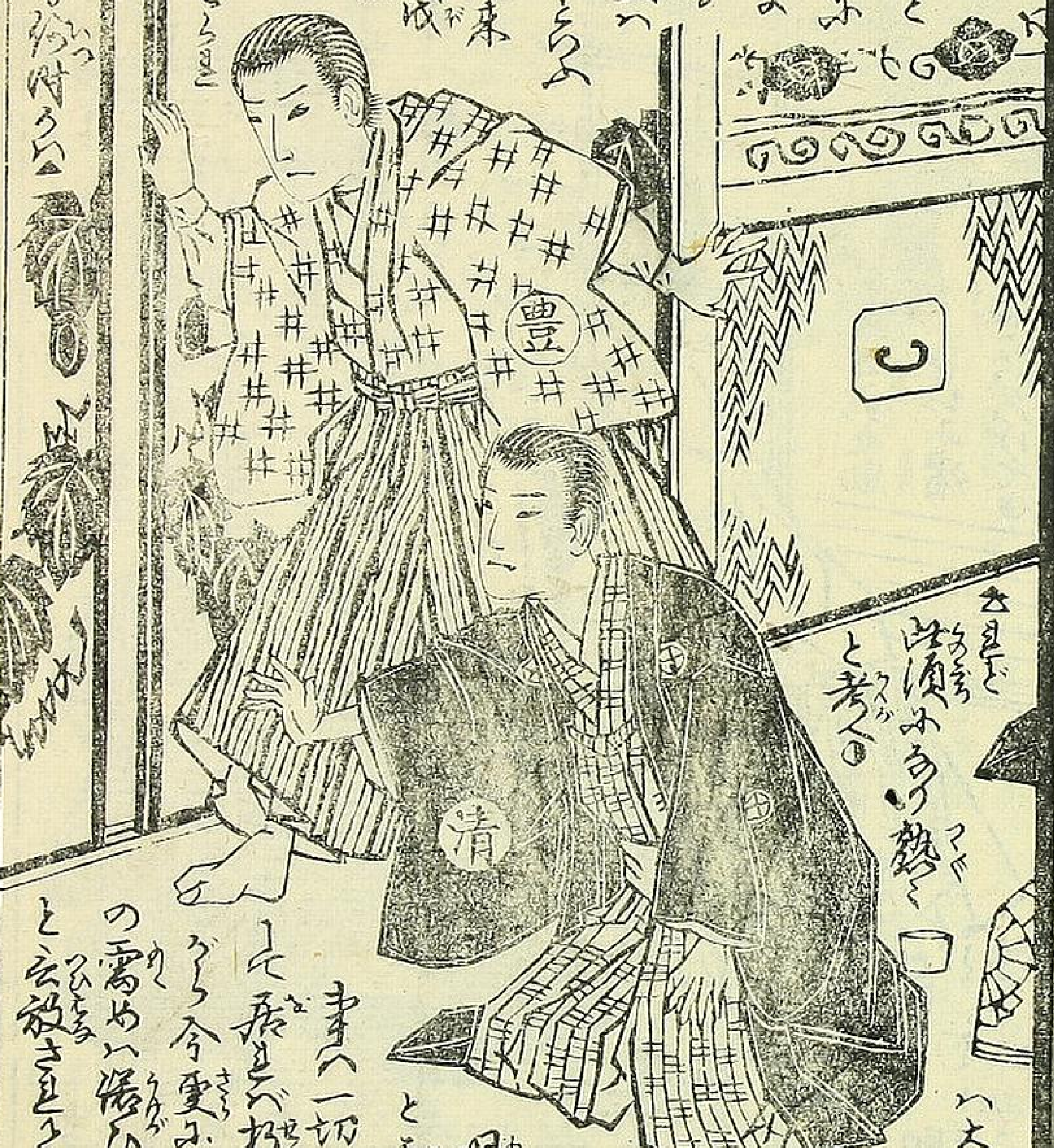
つゞき と云ふ新之助より克己へ一通の
継合せて全く合ふに悦びの色ハ
面ニ顕れし
氣色と見へ
新之助又も同
盟にかくんると
云出し切るゝ
趣意を察して
宇津木中将も
権く不興ゝ
執成せども永
岡更ニ取乱の
色もく些方に
向ひて



△氏根ハ晴さんものと思ひし
まゝ一時同意も
募ッて見たる

◎克己が
今村ハ
善悪
共ニ我
手に首
しゐるを
証と世
為とて最
初同盟し者も
遂く二の足踏
むものあらん
怯みて為
我と謀
殺ぎる

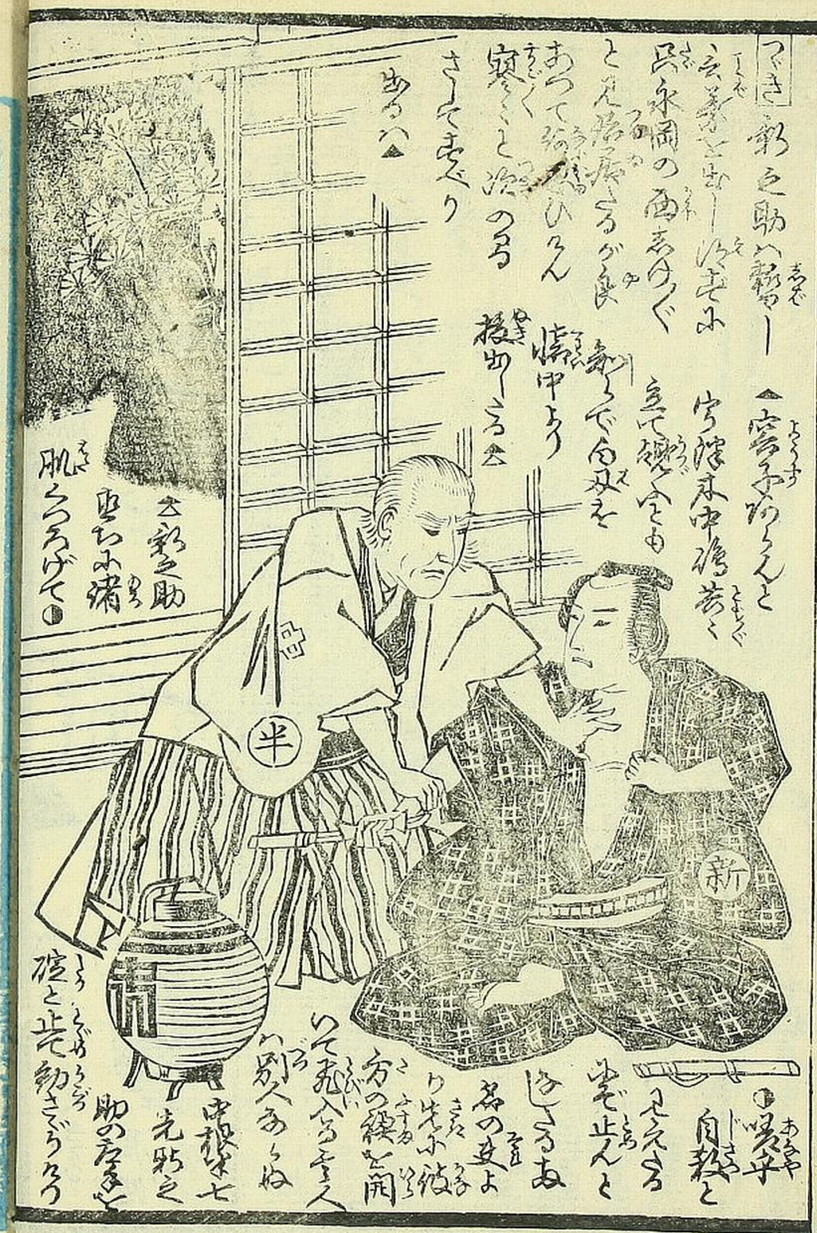
形を正しヤ
十二新之助殿と
やら今ハ名に
幕府の為に
ハテ天晴なる
志あらぬ丈ハ
勝野ぞ新ねらふ
者職分も元来
会津の藩士成
政の役に徹肉
と官位の為
数く不諫瀾せらるゝ
さ
言語ハ猶の事も分附らん



☆克己ハ
是須ふ身の勢く
と考へ◐

ハ大きな
痴漢
徐々
我等
ハ此
友氏
かも来
明さぬ
と手柄を
まハ一切呑込
んで居れバ拙者
から今更ニ足下
の露ハ漏ひさし
と云放さまく

つゞく



官許 朝野新聞 牛角鬼 看法

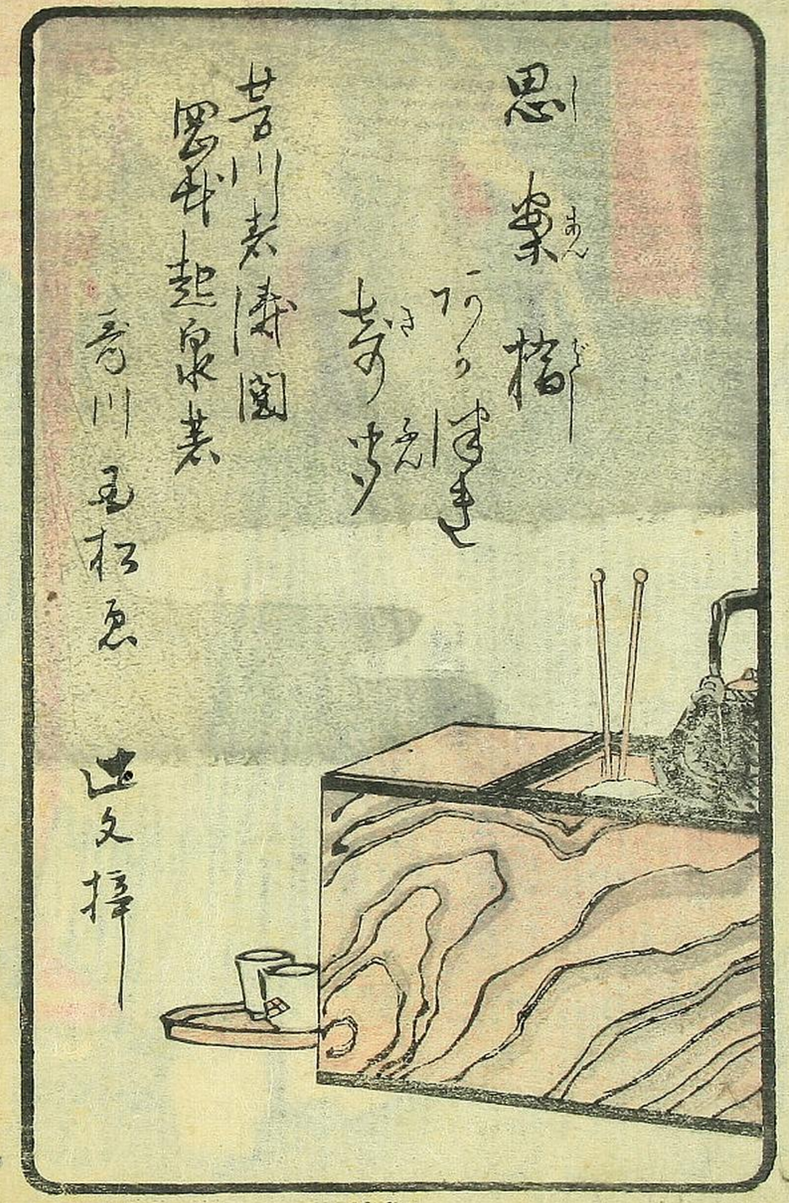
官許 天狗鬼

書肆 地本錦繪問屋 文助

010190514213

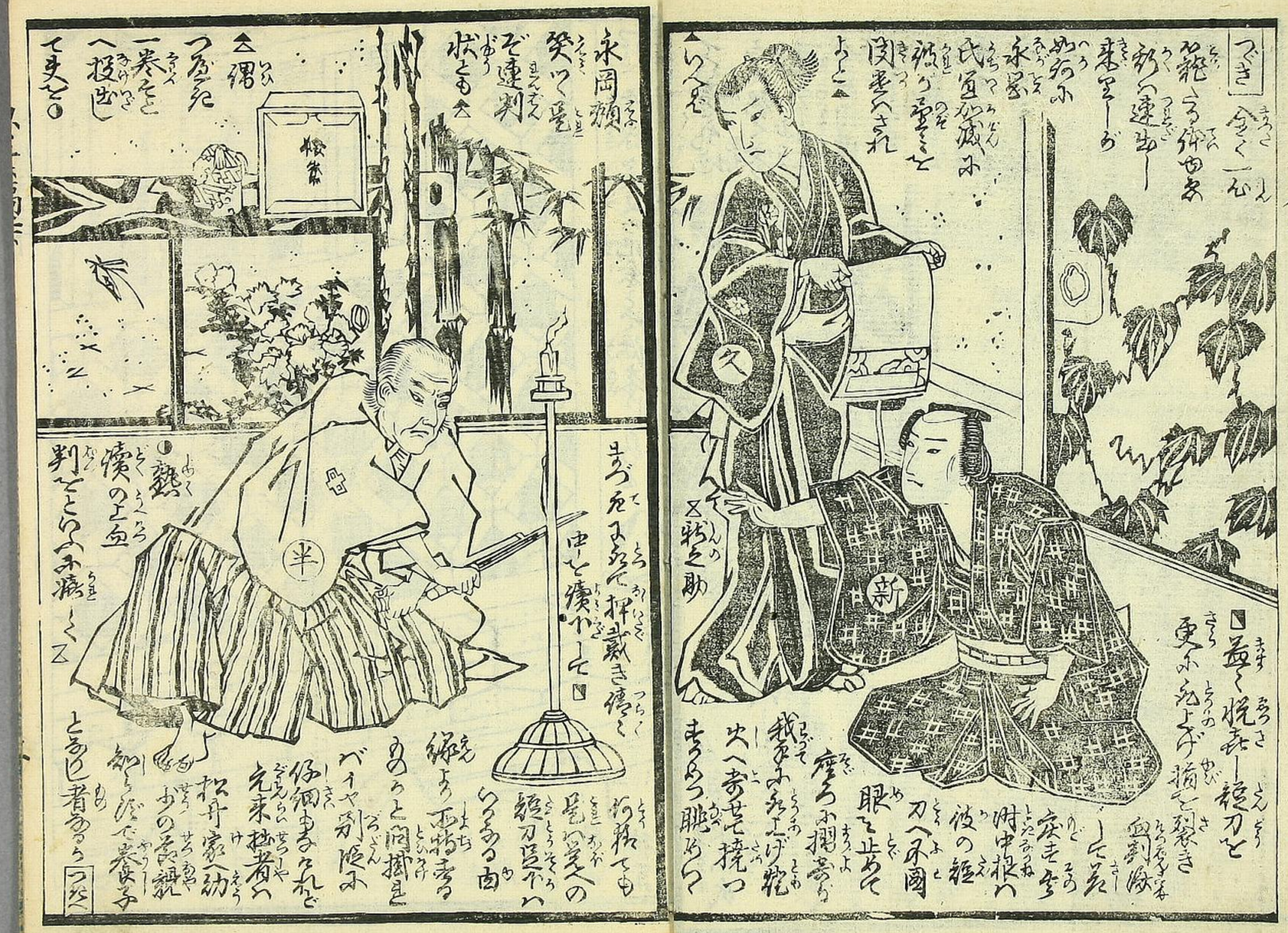
歌川國松画

A540
62



48-8419

つき
久
新
半


つゞき
新
久
半

つゞき

全除実父の紀念として添来りしあと

太物

紙物

好きの

拵へ

後ふ勢養父が給りて授けしまく今も

孔雀と敬さをみ彩いふ拵るをこのゝと

の養人と関より中投へまさ彩之助の

西熟くと行ゆう居しゆ文

良て年齢号

を種くと

問紀し

三指拵て

教へるどさ

その未ふ術へ

是より未三

丁へ中根ゞ

我慢と蓋

昔語りゆう

ろふ美掛け

初

▲気ゞ渋てう

才、彩ぞろでへ今

愛ふよも真手とへ

手は、きゞ分ゆう紀拵へ

此能刀徳うふ吳人の結弟

番みて行戸

屋敷の長屋ふ

在しひみ

文で給るも面御な

ぐう其家个を日

毎の西うふ氣

十業の

弟

我

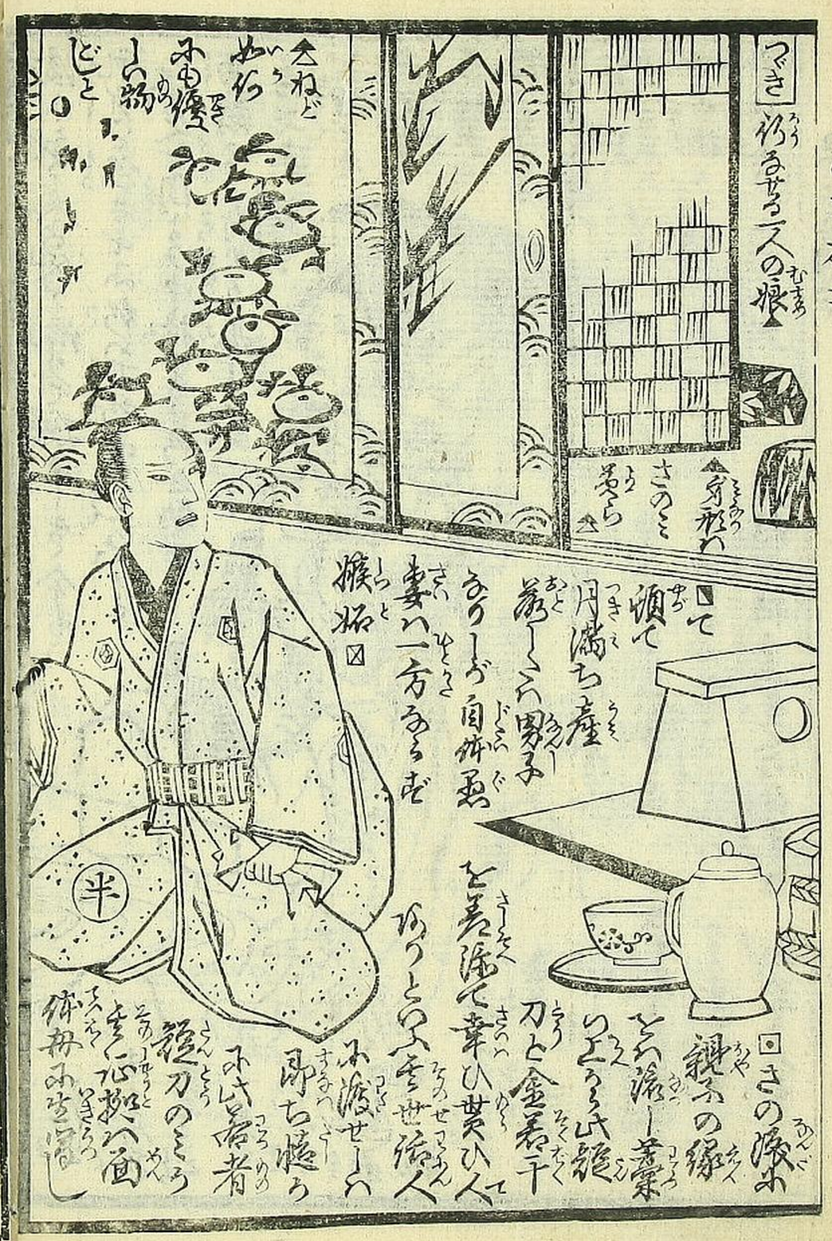
勅

吳ひ出

手も屋拵

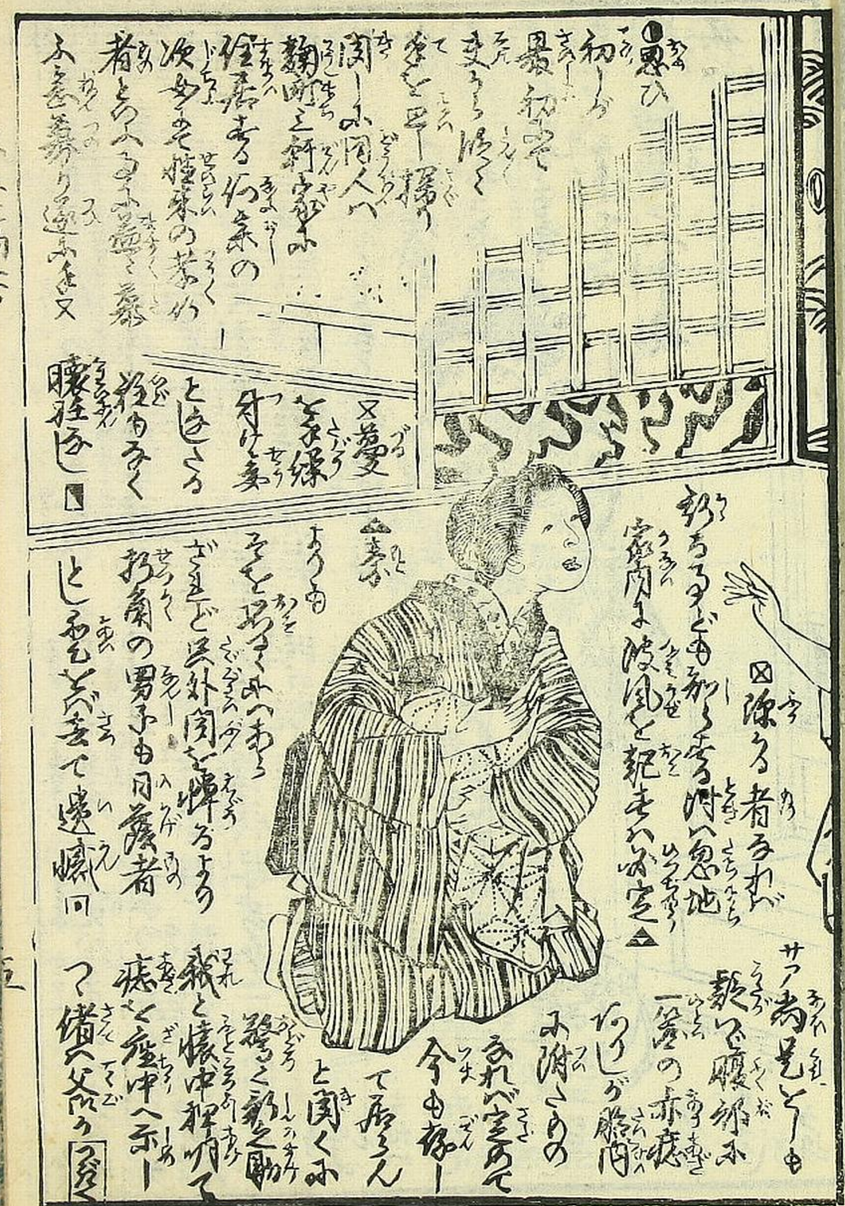
見へやこ

つき 行ゆく末の二人の根



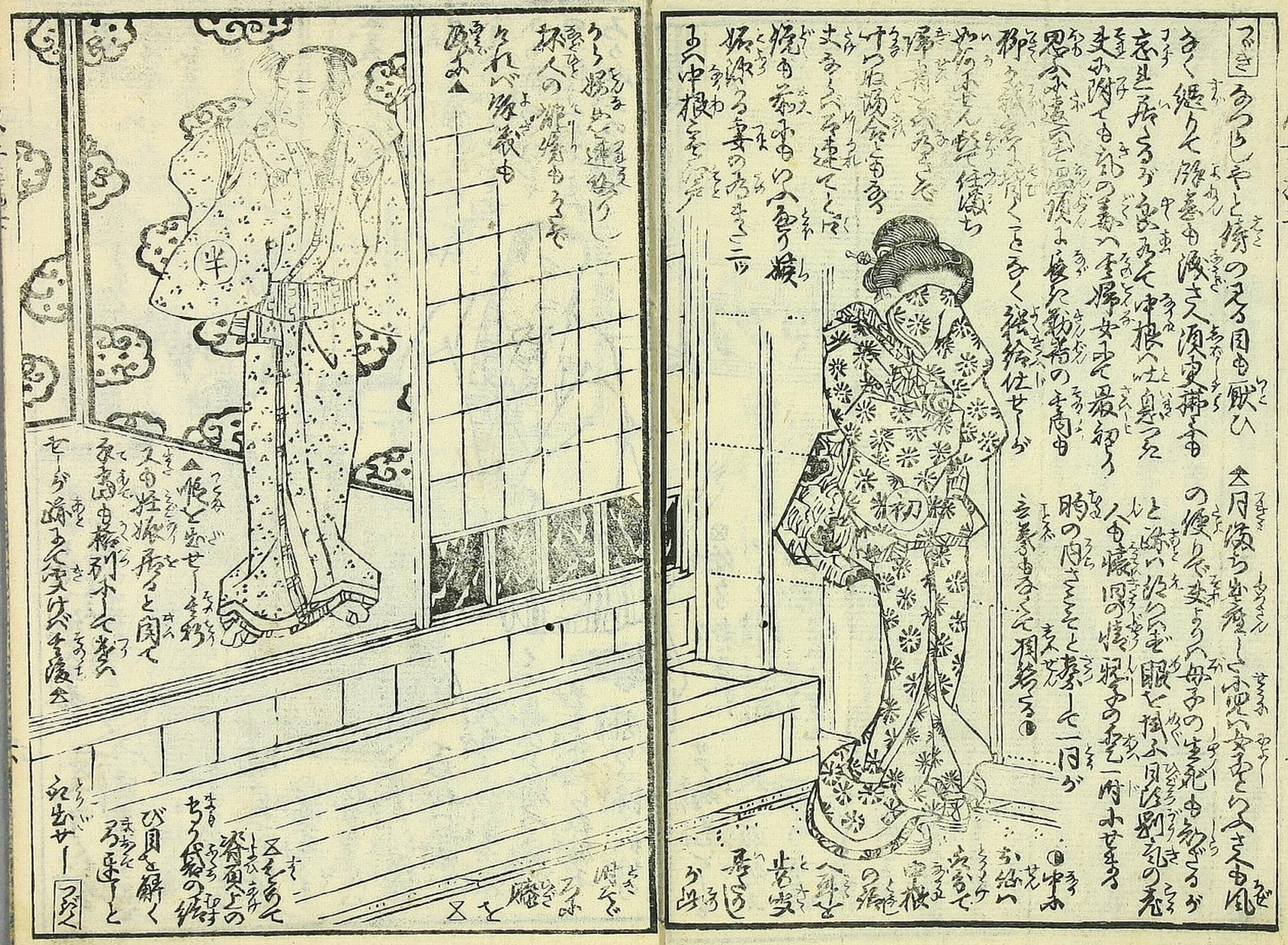
さの浪の
縁の
いとう山
刀と金若干
を差添て幸ひ
なりとの人生世
ふ波せーい
弱ち
みせ者者
強力のこう
体格の
半

て
頃て
月満ち産
為ーこの男子
なりーしが自然
妻は一方ならぬ
猴猫



恵ひ
初りの
暑初
まること
多と平一
関しの同人へ
勧めこ新宅の
住居する仏来の
次多の住来の
者とのこの
ふ
又夢
を緑
牙けて妻
と色さる
程なく
曙程

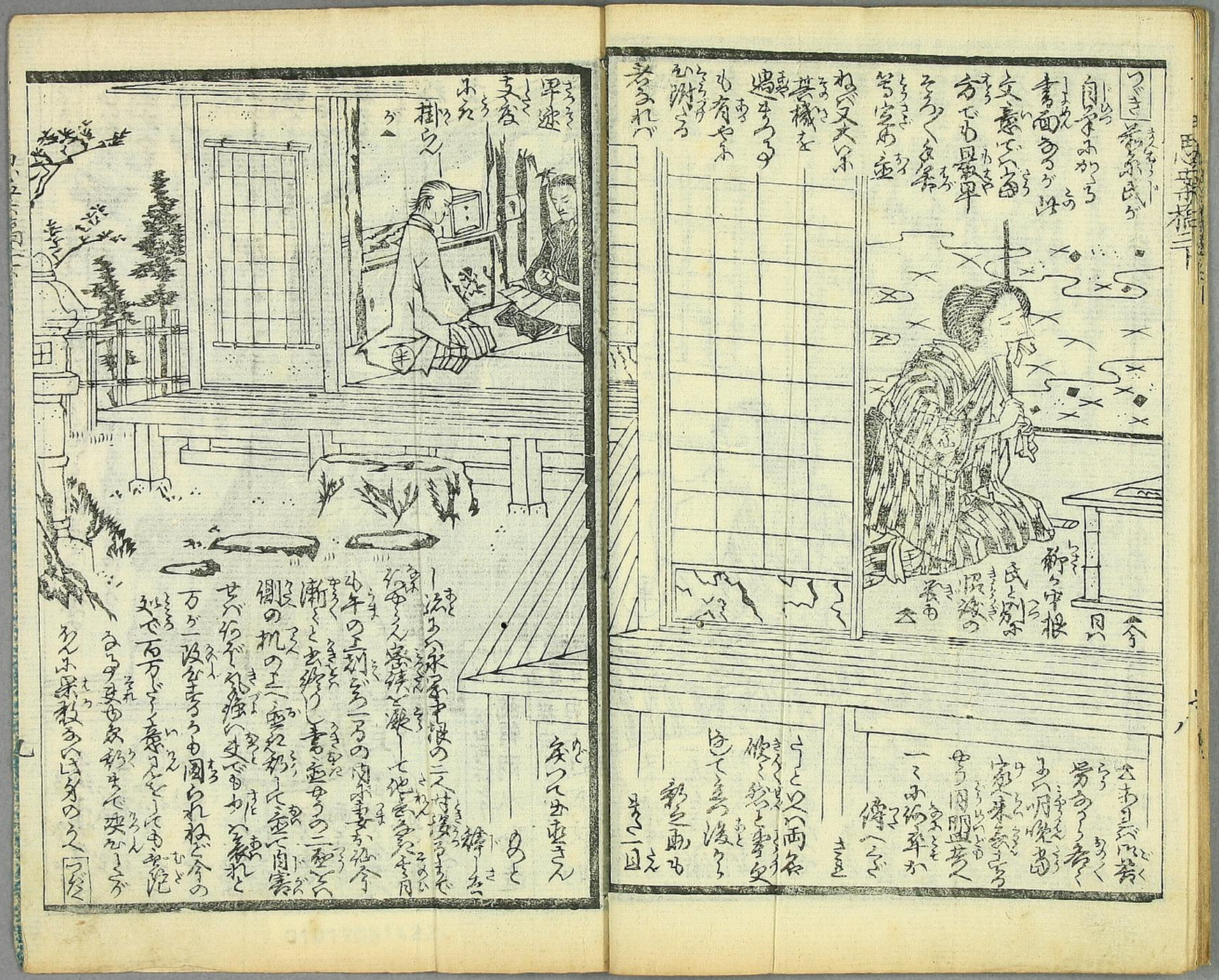
涼る者ならば
家内より波風と起さぬ定
サア為見とも
新宅曙邸ホ
一筆の赤恋
なりしが勝間
み消さのの
あれば宝あて
今も家ー
て居こん
と関くみ
我と懐中程明て
恋く座中へ示ー
つ備へ父の

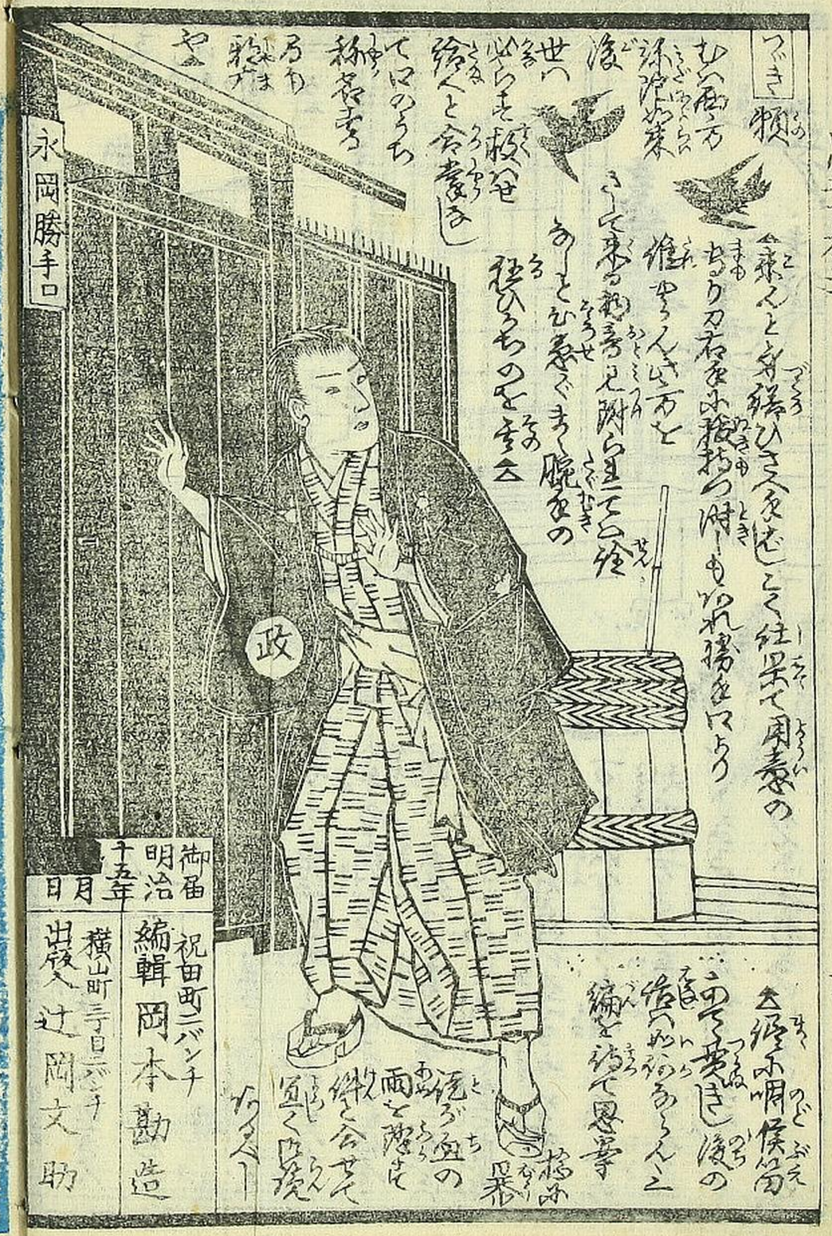

つゞき
初
半

半
久

新

つぎき
新
半





御届
明治十五年
月日
祝田町ニバンチ
編輯 岡本勘造
横山町三丁目ニバンチ
出版人 辻岡文助

010190514221